

生死をわけた50年前 2回の海戦にのぞんで

春日市 美根 和多利

太平洋戦争が始まった昭和16年12月8日は大連市にありました南満州工業専門学校電気科に在学中でした。真珠湾攻撃の戦果を報じた張り紙を見ていました小生にH教授が「日本に帰ってきていてよかったね」と肩越しに声をかけてくれました。

1920年（大正9年8月2日）に米合衆国カリフォルニア州の農村に生まれました。昭和7年家族とともに日本に帰り、旧制朝倉中学校を卒業して無試験で南満州工専に入学しました。戦争もますます激しくなり、昭和18年9月、学徒動員令により繰り上げ卒業となりました。特別措置による徴兵検査の延期も中止され、陸軍の徴兵検査を受け、甲種合格、兵科は砲兵。これはたまたまぬと思っていたら海軍予備学生の募集を知り、早速、応募と共に合格通知を受けました。

昭和18年10月1日、兵器整備の海軍予備学生として千葉県の大湊海軍航空隊に入隊。月火水木金金一文字どおり、ハードスケジュールの教育で「海軍魂」をたたき込まれ、「海軍軍人」に仕立てられました。電探の兵器整備に回されました。海軍の艦乗攻撃機「天山」に電探を整備する実習を横須賀海軍航空廠で行ったのち、昭和19年4月25日付けで実施部隊の3航戦653海軍航空隊附に補せられました。翌26日、653航空隊のあった松山基地へ着任。着任と同時に乗艦を空母千歳に指定されました。右も左も分からぬ電探の整備に取り組みました。5月6日乗艦を空母瑞鳳に変更、2日後こんどは乗艦を空母千代田にと、めまぐるしく変更となりました。

昭和19年5月16日に千代田でボルネオ北東部のタウイタウイ泊地に進出。5月20日豊田副武長官が「あ号作戦開始」の命令を発しました。米機動部隊をマリアナ諸島から引きずり出す戦局変換の大作戦を行う口火を切りました。この間5月31日付けで海軍少尉に任ぜられました。任官者は母艦のガブルームに集合。いまから任官祝いを贈るからと海兵出身の中尉から左右のビンタに鉄拳の「お祝」。口の中が切れて出血。あとは飲めという。酒のおいしくなかったこと。

6月13日の朝、第一機動艦隊がタウイタウイ泊地を出港。当時の空母は大鳳、翔鶴、瑞鶴の正規空母3隻、それに隼鷹、飛鷹、龍鳳、千歳、千代田、瑞鳳の改造空母6隻。航続力の大きい零戦21型に250kgの爆弾を装着させた戦闘爆撃機（戦爆）を母艦に搭載していました。空母千代田に乗船、マリアナ沖へ。6月19日決戦の日を迎えました。本隊の前方を前衛（第二艦隊、三航戦）として栗田健男中将の指揮で進撃。午前7時半ころ三航戦から爆弾を抱いた戦爆、天山、零戦が発艦、マリアナ沖へ。

ところが、昭和19年3月7日神戸川崎重工で竣工したばかりの本隊の第一航空船隊所属の空母大鳳（基準排水量29300t、戦闘態勢で34000t、速力33ノット）が魚雷1発

を右舷首部にくらいました。気化ガスが艦内に充満、引火して大爆発を起こし午後4時半ごろ沈没、海底のモクズと消えました。

タウイタウイに停泊していましたとき、たまたま大鳳を訪れるチャンスがありました。戦艦大和、武蔵級と変わらぬ大きさを飛行甲板の広いこと。なんといっても巨艦だったイメージがいまだに残っています。翔鶴も魚雷攻撃をうけ、命運がつき海中に没しました。さらに飛鷹も魚雷を受け海中へ。乗艦していました千代田も飛行甲板に直撃弾が命中。小砲ですみましたが、艦内で作業していました数人が戦死、遺体は浮かびあがらないように砲弾を遺体にくくりつけて水葬されました。また飛行甲板近くの機銃座で指揮していたとき、空母の前を駆逐艦が横切ったかと思うと、すごい水柱とともに轟沈、空母めがけてくる魚雷を体当たりをもって救ってくれたのでした。帰還してくる飛行機が機動隊の上空にたどりついたとき、母艦の姿がなく、燃料のつきた機はやむなく駆逐艦の近くに不時着していました。同日夜、沖縄の中城湾へ向かいました。かくしてあ号作戦のマリアナ沖海戦は某大な損害を出して終わりました。

別府湾へ引き揚げ大分基地に帰還しました。つぎの作戦に備えて船乗攻撃機「天山」に電探を装備するため鹿屋航空廠へ移動しました。

「捷1号作戦」が発令されました。昭和19年10月20日小澤治三郎中将率いる艦隊が伊予灘を出撃しました。小生は空母瑞鳳に乗艦、25日フィリピン最北端のエンガノ岬沖東方海上に達しました。途中「オトリ部隊として行動する」旨いわれました。ああこれで今生の別れかと覚悟しました。小澤戦艦は24日夕刻、米軍哨戒機に発見されていました。小生もこの目で哨戒機を見てどうして攻撃しないのかなと思いました。あとで考えてみるとオトリ部隊だからわざと逃したのかなと思いました。レイテ湾へ上陸をはかっていた米軍に対し攻撃をかけようとしていた日本海軍が攻めこめるように米航空兵力を引きつけるためのオトリ部隊だったわけです。

午前8時すぎ第1次空襲の米軍機の大編隊が空母瑞鶴はじめ瑞鳳、千歳、千代田を襲った。急降下爆撃、魚雷、機銃掃射とすさまじい修羅場と化しました。まず千歳が沈没。乗艦していた瑞鳳も甲板に直撃弾をあびました。1時間後第2次空襲、その2時間半後、米軍大編隊による第3次空襲、瑞鶴が沈没、続いて瑞鳳、千代田も沈没、これで日本海軍が誇った空母群は全滅しました。命中魚雷2本、直撃弾4発をあびた瑞鳳は夕方船尾から沈みかけ総員退艦とともに海中に飛び込みました。船首を真上に突きあげて沈み行く瑞鳳に吸い込まれそうになりました。泳ぎができないので見回したら丸太棒が浮いていました。神の助けだと丸太棒につかまり救助を待ちました。棒には4、5人つかまっていました。火傷をおったのか海水の痛さにたえきれないで、「痛い」とうめいていた士官もいました。薄暮が迫る海上にランチが近付いてきました。「これで助かった」と力の限りをふりしぼってランチにつかまりよじのぼりました。気がぬけてどさりとランチにすわりこみました。戦艦伊勢か日向からのいずれのランチだったか、命の恩人の艦名を忘れるとはなにごとかと言われそうですが、どうしても思いだせません。すべて空母を失った小澤長官は戦艦伊勢、日向はじめ駆逐艦あわせて10隻を連れて命からが

ら大分基地に帰投しました。

昭和19年11月15日付けで藤沢海軍航空隊附教官の発令を受け、直ちに国鉄久大線で藤沢に向かいました。途中、福岡県朝倉郡三輪村（現三輪町）のわが家に立ち寄りました。ところがおふくろが言うには、ちょうどフィリピン沖海戦の最中に小生がなにも言わずにおふくろの枕元に立ったそうです。てっきりお別れのあいさつに来たものと思ったと言っていました。元気な姿を見てみてびっくりしていました。昭和19年12月16日着任。昭和20年3月1日海軍中尉に任ぜられました。藤沢では防空壕掘りに終始、終戦まで防空壕暮らしでした。この間横須賀市が空襲にあい、消火活動の応援に派遣されましたが全く手がつけられず引き揚げたこともありました。

昭和20年8月15日の終戦の日には上官に呼ばれて「血気にはやるのではないぞ。命を大切にしろ」と静かな口調で言われました。小生が「自決」するのではないかと心配されたのだろうか。いよいよ解隊式が行われ衛兵副司令をしていた小生が海軍旗降下、処分の儀式を行ないました。9月6日解散、藤沢駅からすし詰め列車で故郷へ向かい復員。昭和20年6月19日に福岡大空襲で一面焼野原となった博多駅に降り立ちました。

今思うことは、戦争がいかに愚かで悲惨なものかを示すものであり、絶対に戦争はしてはならぬと、後世に伝えていかねばならないとつくづく思いました。